

## 弱くなりなさい

丸山 勉

### [聖書] ルカによる福音書 5章 27～32節

その後、イエスは出て行って、レビという徴税人が収税所に座っているのを見て、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は何もかも捨てて立ち上がり、イエスに従った。そして、自分の家でイエスのために盛大な宴会を催した。そこには徴税人やほかの人々が大勢いて、一緒に席に着いていた。ファリサイ派の人々やその派の律法学者たちはつぶやいて、イエスの弟子たちに言った。「なぜ、あなたたちは、徴税人や罪人などと一緒に飲んだり食べたりするのか。」イエスはお答えになった。「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。」

### [序] 人間という存在

先ほど一緒に読んだ交読文の中で、このようにありました。詩編 8 編の中の言葉ですが、「人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう あなたが顧みてくださるとは。神に僅かに劣るものとして人を造り…」(5～6節)。

私たち人間はどこまでも神様によって造られた者、けれども、その私たちが神様は、ご自分に僅かに劣る者として造られた、と言うのですね。

人間という存在は、どこまでも「限界」を持っている存在、しかし、人間は、他ならぬ神様に造られたが故に、驚くべき「尊厳」を与えられている存在なのだと言っています。そして、神様と私たちの関係というのは、「あなたが顧みて下さるとは」と言われているように、まず、私たちに対する神様の顧み、御目を留めて下さる、その愛が先にある、ということが大切なことだと思うのです。

そのことは、今日の福音書の箇所でもよく現われていると思います。まず、主イエス様が、この収税所に座っていたレビという人物に目を注いだのです。

### [1] レビの救い

27節に、「その後、イエスは出て行って、レビという徴税人が収税所に座っているのを見て」と書いてありました。主語はイエス様です。そして動詞は「見た」。徴税人レビを「見た」。この「見た」という言葉をルカは強調していると言われます。これは、単に「見る」＝「眺める」というようなことではなく、「じっと見つめて」という意味が込められているそうです。

主イエス様は、私たちに目を注がれています。その時、主は私たちの外見や肩書き、或いは財産で判断なさいません。主がじっと見て下さるのは、私たちの内側です。そこにある 渇き、訴え、悲しみ、孤独、そのようなもの——他の誰も踏み込む

ことが出来ない、そのような私たちの心——を、主は見ておられるのです。「愛」をもって、です。

主は、このレビに「私に従いなさい」と声をかけられました。すると、「彼は何もかも捨てて立ち上がり、イエスに従った」(28節)とあります。座り込んでいたレビが、立ち上がったのです！これが、主イエス様の呼びかけの力なのではないでしょうか？かく言う私もそうなのです。イエス様が私に「わたしに従って来なさい」と、声をかけて下さった。献身とは、ただそれだけなのです。自分の能力や経験に頼るとか、周到な準備が出来たから従うのではありません。むしろそれは邪魔にさえなるかと思えます。大切なのは、イエス様の招きの力です。そして、このレビのような単純な応答だと思います。自分が握りしめていたものを手離しても惜しくはない、と心から思わせて下さるのは、ただ**神様の愛、イエス様の招き**があるからですよ。ね。

このレビの心の中に何が起こったのか、聖書は彼の心の内を小説のように記していません。しかし彼が本当にイエス様に招かれて、飛び上がるように喜んだということは分かります。「**自分の家でイエスのために盛大な宴会を催した**」とあります。これまで恐らく**お金の力こそが自分の力**だと思っていた者（そのような人は、意外とケチな人が多いように思えます）が、今、全くお金を惜しんでいません。多くの人々を招いて、ご馳走を振舞い、皆で食卓を囲み、楽しんでいきます。

これは、あの**ザアカイ**と同じですね。ルカ福音書の19章に、エリコの町に住んでいた徴税人のかしらであったザアカイがイエス様と出会って、金に頼るこれまでの生き方からスッパリとさよならをして、これからは貧しい者たちにも財産の半分を施しますと宣言した出来事がありますけれども、**魂の救い**は、そのように外に現われてきます。**人生が変えられる**、ということですね。

## [2] イエス・キリストが来られた意味は

このレビが開いた喜びの宴が開かれている間、それを外野席からシラッと眺め、つぶやいている人々がいました。「**ファリサイ派の人々やその派の律法学者たち**」と書いてあります。皆から一目置かれている真面目な人物たちです。旧約聖書の律法に精通している、言ってみれば「私たちこそ信仰者の代表」との誇りを持っている人物たちであり、彼らにとっては、新参者のイエスがどんどん影響力を持ってきていくことが面白くないのでしょう。イエス様に直接言うのではなく、その弟子たちに聞くのですね。

「**なぜあなたたちは、徴税人や罪人などと一緒に飲んだり食べたりするのか。**」(30節)それを耳にしたのでしょう、イエス様自らがこう言われました。

「**医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。**」(31～32節)

ファリサイ人や律法学者たちはこの言葉をどう聞いたのでしょうか？ ピンとこなかったのではないのでしょうか。少なくとも**嬉しい言葉、福音の言葉**として聞けなかったのではないかと思います。イエス様は、ご自分がこの世に来られたその意味をここで大胆に語られています。それは、あなた方は皆、言ってみれば**健康な者ではなく、病人なのだ、まことの神様以外のものをあなたの土台・拠り所としている、神様から背を向けている罪人なのだ、そのあなたを招き、悔い改めに導き、癒すためにわたしは来たのだ**、という宣言です。

この言葉は、私は「分水嶺」だと思います。高い山の稜線に雨が降ります。そうするとその雨水は尾根の東か西か、どちらかの水系に分かれて流れていく、そういう地点があるように、このイエス様の言葉は、私たちに「あなたはこの言葉を受け止めるのか、或いは、聞き逃してしまうのか」——。それを突きつける真剣な言葉だと思います。

イエス様をご存知なのです。人の心の奥底に何があるのかを。聖書が「罪」ということを語るとき、それは、私たちの心の**あくどさ、卑怯さ、うぬぼれ、自己中心**と言ってよいものだと私は思います。それは**普段は隠されています**。なぜなら、私たちの生活は**相対的な評価**の中で支えられていることが多いからです。**学歴やキャリア、或いは資産や財産、或いは他者からの評価**が、本当の自分を覆い隠す「隠れ蓑」になってしまうことがないのでしょうか？ しかし私たちは、突きつめると、そのような世間的価値・比較の中での価値では、本当の喜び、平安はないと思うのです。

### [3] ある子どもの詩から

ひとつの詩をご紹介します。これはとても心が揺さぶられる詩です。児童文学作家で、元小学校教師だった**灰谷健次郎氏**が、自分の教え子が書いた詩を紹介してくれたものです。書いたのは、当時小学校3年生だった村井安子さんです。「**チューインガムひとつ**」という詩です。

せんせい おこらんとって せんせい おこらんとってね  
わたし ものすごいわるいことした

わたし おみせやさんの チューインガムとってん  
一年生の子とふたりで チューインガムとってん  
すぐ みつかってしもた  
きつと かみさんが おばさんにしらせたんや  
わたし ものいわれへん からだが おもちやみたいに カタカタふるえるねん

わたしが一年生の子に「とり」いうてん  
一年生の子が 「あんたもとり」いうたけど  
わたしはみつかったらいややから いややいうた

一年生の子がとった  
でもわたしがわるい その子の百ばいも千ばいもわるい  
わるい わるい わるい わたしがわるい  
おかあちゃんにみつからへんとおもとったのに  
やっぱり すぐ みつかった

あんなこわいおかあちゃんのかお 見たことない  
あんなかなしそうなおかあちゃんのかお 見たことない  
しぬくらいたたかれて「こんな子 うちの子とちがう 出ていき」  
おかあちゃんはなきながら そないいうねん

わたし ひとりで出ていってん  
いつでもいくこうえんにいったらよその国へいったみたいな気がしたよ せんせい  
どこかへ 行ってしまお とおもた  
でも なんぼあるいても どこへもいくところあらへん  
なんぼ かんがえても あしばっかりふるえて なんにも かんがえられへん

おそうに うちへかえって さかなみたいにおかあちゃんにあやまってん  
けど おかあちゃんは わたしのかおを見て ないてばかりいる  
わたしは どうして あんなわるいことしてんやろ

もう二日もたっているのに おかあちゃんはまだ さみしそうにないている  
せんせい どないしよう

灰谷さんの本によると、この詩は、すんなり出来た詩ではないということです。そこにはこのような過程がありました。はじめ、この安子ちゃんは、「チューインガムを盗んだ。もうしないから、先生、ごめんしてください」という意味の簡単な紙切れを持って、母親に引っ張られるようにして来たと言うのです。灰谷さんはそれを見て、「安子ちゃん、ほんとうのことを書こうな」と一言言うと、安子ちゃんは泣き出してしまいました。けれどもお母さんには帰ってもらい、安子ちゃんと二人っきりになって時間を過ごしました。

灰谷さんはこう書いています。「盗みという行為と向き合うことは本当に苦しいわけで、彼女は許しを請うことによってそこから解放されようとしている。それはわかるわけです。しかし、本当のことを言っていることではないという思いがやっぱりぼくにある。盗みという行為によっていったん失われた人間性を回復するためには、もう一回盗みというものと向き合うしかないと思うわけです。強制をしているみたいなことになるわけですがけれども、しかし、ぼくもかつて幼い時に盗みをしたという体験があるので」と書いています。それで、安子ちゃんに詩を書い

てもらった。彼女は涙を流しながら、長い時間をかけながら詩の言葉を生み出してゆきました。その間、灰谷さんはじっと見ているだけです。

「なぜこんなむごいことをしているのかという思いが片っ方ではあるのですけれども、中途半端に終わらせることはできない。ぼくは、すべての感覚を安子ちゃんに集中している。それが共に涙を流すということにもなるわけですが、安子ちゃんはそれをしっかり受けとめてくれたわけです。あの作品が生まれるまでに彼女はどれくらいひどい血だらけの格闘をしたか。」と灰谷さんは書いています。

これは、ある見方からすると残酷なことかもしれません。しかし、これは簡単に水に流してはいけないことだと灰谷さんは思ったのですね。「はい、気分を変えて、もう忘れて、前を向いていこう」と言うことも出来るでしょう。けれども、それで、一時的に霧が晴れても、根本的な解決、癒しになるでしょうか？ これは一人の小学生の女の子の問題ではないと思います。私たち一人ひとりの問題、「罪」の問題です。

#### [結] ただ神様の愛の招きだけが私たちを生かす

主イエス様は、灰谷さんがそうであるように、いえ、それ以上に私たち一人ひとりに真剣に関わり、愛し、そして、水に流すのではなく、私たち一人ひとりの「罪」を、ご自分が担って下さるといふ、驚くべき解決を私たちへ下さるお方なのです。イエス様はおっしゃいました。

「医者を必要とするのは、健康な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。」——この言葉は、主イエス様の「宣言」であると同時に、「招き」の言葉です。

今日の礼拝の初めで読んで頂いた招きの聖句はこういうものでした。

「主は、打ち砕かれた心に近くいまし、悔いる霊を救ってください」(詩編 34 : 19)。主イエス様は近くにいて下さるのです。特に私たちの心が打ち砕かれている時に！ 強がりではなく、本当に自分の弱さを見つめることへと導かれる時に！ 私たちは強い時ではなく、弱い時に、深く主と出会うことが出来るのです。そして、悔い改めの霊、つまり神様へと立ち返る私たちを神様は喜び、救って下さるといふのです。

ルカ 5 章のレビは、鮮やかに主の招く声に従うことが出来ました。きっと「わたしの人生、このままで終わってよいのか」と、心の深い所で救いを求めていたのだと思います。そこにイエス様の招きがあった。まことに幸いな出会いでした。

一方、ファリサイ人や、律法学者たち。私は彼らの中に、私自身の姿を見せられます。「他人を裁くあなた方は一体何者なのか」といふことです。そして結局は「信仰」と言いながら、他者との比較の中で自分の位置を得ている。安住している。それが神様の前には、どれだけ脆いものであるのか、ちゃんと見抜いて欲しい。それは「自分を神とする」罪に他ならないのだ、そうイエス様は指摘しているように思うのです。

—「医者を必要とするのは、健康な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。」

私たちは、おかしい言い方かもしれませんが、「正しい病人」になりたいと思います。「正しい病人」、それは、自分の力では自分を治すことが無理だ、と知っているということです。私はまだ大きな手術を受けた事はないのですが、もし手術を受ける時は、そのお医者さん、執刀医を信頼し、宜しく申し上げます、と委ねるでしょう。「いやいや、わたしが自分でやります」などということは笑い話です。

誰よりも私たちのことをご存知のイエス・キリストが、私たちの心にメスを入れ（それは時にとっても辛いことでもあります。見たくない自分の真相を知らされるのですから）、そして、このまことの医師は、私たちを本当の意味で生かして下さるのです。神の独り子のいのちを、私たちの中に注いで下さるのです！ そのために、彼は十字架で命を捧げられ、私たちの身代わりとなって下さいました。「わたしはそのために来た」とおっしゃって下さっているのです。このお方の前に弱いままで自分をさらけ出す時、私たちは神様によって、本当に自分の人生を愛することが出来るようになります。そして他者の人生をも尊び、一緒に生きるようにされると思うのです。これが御言葉の招きの力、神様の愛の力です。

この招きに、私たち個人として、また、教会として応えて行きましょう！

お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、聖なる御名を讃えます。

何とあなたからかけ離れてしまっている私たちでしょうか。しかもそれになかなか気付けません。どうぞ、御言葉によっていつも私たちを照らし、探り、悔い改めへと導き、あなたとの関係を回復させて下さい。

あなたは何度でも何度でも新しく私たちを招いて下さいます。それは、あなたの私たちに対する愛が限りがないからです。どうぞ、私たちの心を柔らかくして下さい。あるがままの自分として、弱いままの自分としてあなたの前に身を置くことが出来ますように。そこで与えられる真の安らぎと自由に生かして下さい。お互いが受け入れあって生きるこの国、この社会、また、私たちの教会の交わりとしても育て、導いてください。

救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。

アーメン。